



社会の変化と 新宗教運動

ブライアン R.ウィルソン博士
名誉助教授

オックスフォード大学
イギリス

1995年8月2日



社会の変化と 新宗教運動

社会の変化と
新宗教運動

目次

| | |
|--------------------|---|
| I. 宗教的不寛容の伝統 | 1 |
| II. 「新しい」ムーブメントの経験 | 2 |
| III. 現代の新宗教ムーブメント | 3 |
| IV. 病理学的なケースの影響 | 4 |
| V. 矛盾する非難 | 4 |
| VI. サイエントロジーへの敵対 | 5 |
| VII. 社会の変化と宗教的な反応 | 7 |
| 著者について | 9 |

社会の変化と 新宗教運動

ブライアン R. ウィルソン博士
名誉助教授
オックスフォード大学
イギリス

1995年8月2日

I. 宗教的不寛容の伝統

キリスト教の初期から、西洋社会は宗教に対する強力かつ意識的な不寛容の伝統を受け継いでいる。キリスト教徒の献身は排他的なものであった。キリスト教は、それこそが唯一の真の信仰であり、それ自体が全人類の普遍的な忠誠にふさわしいものであると宣言した。それは自由意思に基づく信仰であったため、全人類を改宗して帰依させるために、初めから容赦なく改宗に取り組んだ。この独自の属性が、初期のキリスト教と同時代の他の宗教ムーブメント（民族に基づいたユダヤ教、広く行われている秘跡、そして他の宗教に対して寛容、または少なくとも他の宗教に対して無関心、または関心を持たない皇帝崇拜など）との区別をもたらした。中世のキリスト教では、その異教徒の信仰（改宗させられるべき信徒）に対する強引な改宗が続き、キリスト教信仰に対する不規則または異端的な徴候には、抑制に対してさらに厳しい方針が発達した。異端は死によって罰することができた。トーマス・アキナス（1225-74年）によっ



て神学的に正当化されたその方針は、異端審問(1232年に設けられ、1820年によくスペインで廃止)によって容赦なく実施された。宗教改革によって、ひどい不寛容の形態は減少したが、キリスト教による「逸脱者」に対する姿勢に向けられた敵意は、最も寛大で進歩的であった新教徒のいる国々においてでさえ継続した。

II. 「新しい」ムーブメントの経験

宗教改革後、さまざまな形態のキリスト教信仰が、安定した支持者の集まりを手に入れ、新宗教ムーブメントとして現れたが、彼らはほぼいつでも極度の不寛容に遭遇した。フッター派はスイス・チロル地方から始まり、何度も迫害され、それを逃れるために一集落から中央ヨーロッパ各地の別の場所へと散った。17世紀後半のイギリスでは、クエーカー教徒が絶えず嫌がらせを受け、その多くが自らの信仰のために投獄された。18世紀には、初期のメソジスト派が頻繁に襲われたり、礼拝堂を焼かれたりした。地元の法務官と執行官は、しばしばそのような迫害に加担したり、暴徒の行動を刺激したり、法律を遵守する宗教家たちを、被害者というよりも罪人として見なした。19世紀後期のイギリスでは、初期の救世軍の支持者たちが似たような敵対行為を被った。1年だけで600人以上の救世軍「兵士」が、有力な酒造業者が仕向けた「乱暴者」によって襲われた。一方、数年の間に、ほぼ同数の救世軍の職員が、高速道路を塞いだといった疑わしい理由や、でっち上げの容疑で投獄された。1890年代のスイスでは、救世軍が詐欺や経済的搾取のために訴えられた。19世紀の初めには、スカンジナビアでモルモン教の宣教師に対して同様の訴えが起きた。

20世紀の初め、いくつかの新宗教に対する反発がさまざまな形で表明された。クリスチャン・サイエンスにおいては、精神的治療の主張とその物質の現実性の否定という両面が激しく非難された。その激しい非難は大部分が文学からであり、マーク・トウェインの風刺から、著名な歴史家H.A.L. フィッシャーによる猛攻撃にまで及んだ。その中でも本格的な敵対的論評は、聖職者、医療従事者からのものであり、より軽いものでは風刺記事や漫画、風刺小説のジャンルからであった。20世紀前半に新たなムーブメントとして見られているエホバの証人に対する反対は、より物理的に示された。第二次世界大戦中、合衆国において彼らは群衆による暴力を受けた。そして汚名を着せられ、リンチを受けた者もいた。彼らは合衆国だけでなく、アフリカ・マラウイのような国でも、国旗に敬礼したり、国歌を斉唱するのを拒否したことで迫害を受けた。ここ数十年の間でさえ彼らの良心的参戦拒否は、フランス、スペイン、ギリシャで法に基づいて起訴された。1940年代から50年代にかけて、カナダのケベック州では、法律を遵守するこのセクトが、司法官によってさまざまな法律の違反行為の嫌疑で執拗に追われた。そのような例は増大し、それらは宗教への不寛容を継続的に発生させるようになり、新興の宗教組織や宗教的実践の新たな概念に対する敵意を生じさせた。

これらの事例すべてに共通しているのは、被害を受けたこれらセクトが、すべて比較的新しく少数派の宗教ムーブメントであった時代の頃だったということである。公認宗教の規定とは異なる意見を快

く受け入れた、または自分自身の神や救済、信仰の概念を保持することを選んだ、または現代の世俗的な社会の規範に挑んだために、彼らは不信の対象となり、社会を混乱させるスパイと見なされた。

III. 現代の新宗教ムーブメント

時間の経過とともに、かつての新宗教ムーブメントに対して、より大きな社会からの受容性を得られる傾向がある。一世紀かそれ以前にはセクトやムーブメントだった、セブンスデー・アドベンティスト教会、モルモン教、エホバの証人などは、よく知られるようになり、事実上容認されるようになった。また頻繁に社会の非難の犠牲者である一方、彼ら独自のやり方で機能することが次第に許されてきた。しかし、差別や反対が存続し、新たに生まれた宗教団体に関して、その状況は以前のように持続したが、過去50年の間に西洋社会における新宗教の数は劇的に増えた。いくつかは主要な東洋の信仰の変形から派生したものであり、その他は宗教的伝統における要素のさまざまな再評価から現れた。しかし、先住民の民間宗教を利用したものであるとか、古代の異教信仰の現代版であると主張する人もいる。また、自然科学、コミュニケーション技術、さまざまな形態の精神療法における進歩に対応して、精神的な反応として現れたという人もいる。多くの人々が人間の潜在能力に目覚め、解き放つこと、そして現代社会における人間の増大する世俗的な経験に対して、精神的な面を開拓しようとしている。この分野の学者たち誰もが、これらの新しいムーブメントの多様性を強調しており、それらのムーブメントに共通してあるのは唯一、それらの出現が同時代であったことである。しかし、ここではっきりとわかるのは、この新宗教ムーブメントに関する、著名人による発言やメディアでも明らかのように、これらのムーブメントがステレオタイプ化された、ひとつのものにされる傾向があることである。この傾向自体が新宗教の公正な扱いに良くないことは明らかである。良くも悪くも、ひとつのムーブメントによる、公共の善に反する行動や態度が公然と非難された場合、その主張（一般大衆がよく知らされていない、それぞれの特定の立場や活動に関するもの）は、そういったムーブメント全体に移行しやすい。これらのムーブメントはほとんど知られていないので、誤解、噂、神話、中傷がそれらの評判を容易に増大させる。メディア自体がそのように機能するので、ある疑惑が生まれると、報道関係者はより以前のメディア・レポートに頼り、確証があろうとなかろうと、それを馴染みのストーリーで何度も繰り返す傾向がある。こうして社会学者が「否定的な即興の事件」と呼ぶものをつくり上げる。

IV. 病理学的なケースの影響

いくつかの劇的で特殊な逸話が、新宗教への敵対的な反応を増進させた。カリフォルニア州で数々の残虐な殺人事件を引き起こしたチャールズ・マンソン・ファミリーであれ、テロ活動に携わっていたシンバイオニズ解放軍であれ、いかなる適切な意味においても宗教ムーブメントと見なすには議論の余地がありながら、メディアはそれらをためらいなく新宗教ムーブメントとして説明した。1978年に南アメリカ・ガイアナでジョーンズタウンの悲劇を引き起こした中心人物ジム・ジョーンズは、確立された宗派ディサイプルス・オブ・キリスト（新興プロテスタント）の聖職者であり、新しい宗教ム

ームメントではなかった。1993年のテキサス州ウェーコでの大虐殺事件、1994年のカナダとスイスでの太陽寺院 (Solar Temple) のエピソード、1995年の日本でのオウム真理教による殺人事件、これらの新宗教に関連する病理学的な現象は、**特殊なムーブメント**に対するものであって、新宗教全般のものではない。このような出来事は、幸いにもまれであるため、大局的に見る必要がある。先進産業社会 (西洋諸国や日本) で活動する何千もの新宗教は、この種の奇抜なエピソードとは無縁だと見なされている。しかし、これらの悲劇が民衆の心に深く傷跡を残しており、完全に正当な理由が常にあるわけではない。なぜなら、それらは新宗教組織によるものとされ、そのようなムーブメントのイメージは不当に傷付けられやすい。とはいえ、実際には大部分の新宗教団体が、それらの信者に対して道徳的、社会的、精神的な援助を与える、当たり障りのない仲介役としての機能があり、新宗教グループについて引き起こされ、道徳的パニックを誘発してきた認識とは全くかけ離れたものである。

V. 矛盾する非難

ある宗教が (宗教とは「古く」なければならないという一般的な考えが支配的な社会において) 「新しい」という事実のために敵意が刺激されるのに加え、現代のさまざまな新宗教が、それ自体にある特徴のために攻撃されることがある。そのような攻撃は、単なる矛盾にまでそれで行ってしまうことがある。したがって、いくつかの新宗教 (メンバーに日常生活の主要な活動に参加することを奨励する) は、主要な社会施設や企業に「潜入している」ように見られ、コミュニタリアニズム (共同体主義) を実践するその他のグループは、地域社会と分離した生活スタイル、そして主要な社会活動から人々を引き離していると批判されている。ある宗教は、その快樂志向や性行為、薬物使用に寛容な態度に対して非難を受け、他のものは、若者たちを非常に禁欲的な人生に耐えるよう勧めることに対して、同様に敵対的な非難を受けている。さまざまな社会の力が現代の家庭崩壊を促している時代において、新宗教が「家庭を崩壊する」と、攻撃の矢面に立たされることがある。そのような攻撃は、いつもながら新しいムーブメントに対する非難に向けられ、正当な理由などなく、似たような非難が過去何世紀にもわたって修道ムーブメントに対しても行われていた。

VI. サイエントロジーへの敵対

通常、新宗教全般との関連で刺激された人々を含め、さまざまな利害関係がサイエントロジーへの敵対を促したように見える。

まず、サイエントロジーは合理的な手順の適用から精神的な洞察を得ることを主張するため、疑いをかき立てられるかもしれない。伝統的な宗教に献身する人たちは一般的に、宗教的価値観は合理的な領域を完全に超越し、宗教的真理や精神的恩恵を技術的な手段によって体得できるようになるという考え (つまり、自分自身の神聖な概念の崇拜と道徳性以外のもの) に直面させられるであろう。合理的な手順と体系的な学習は、古代宗教の真実の追求や精神的経験よりも科学、技術、経

経済学の特徴を帯びている。サイエントロジーが精神的な目標と、合理的かつ技術的な（そして実際には科学技術的な）手段とを結合させているため、確立された宗教に献身している人たちは、それを「本物」ではない宗教として非難する傾向がある。サイエントロジーは古代のしきたりよりも現代的な知識を利用し、聖礼や儀式といった通常の宗教的概念を最小限に、または放棄したり、宗教的目標の追求に実用的信条を採用しているため、彼らはそれを偽りと見なしている。どの宗教団体にも宗教的施しや寄付が必要であることを度外視しても、彼らはサイエントロジーについてこのようにも見ている — 信者は自らの指導の費用について、宗教というよりもあまりにも商業的でビジネス志向であり、サービスの支払いをあまりにも直接的な方法で支払うように求められる。したがって、サイエントロジーの経済的な取り決めは搾取的であることを示すので、そのムーブメントを宗教として見なすことはできない。しかし、そのような非難を推し進める人々は、公認の教会に不可欠な財務的需要が、確かに信者に頼っていることを認識していない。カトリック教会は信者からの支払いとして、プロテスタントの宗派の規約や十分の一税として、過去には主要な教会で、今でも数多くのキリスト教のセクトで要求されている。これら財務的な取り立ては、その支払い手順がしばしば古代の慣習によって神聖化されたり、聖書の正当性によって認可されたりしているというだけで、別物のように見られる。サイエントロジー教会における経済的な取り決めを批判する人たちは、伝統的宗教の経済的手順にある基礎的な機能との類似性を無視している。その理由は単に、伝統的宗教は形態が異なっており、それには通常古さと神聖さが備わっているから、ということである。

二番目に、サイエントロジーは過去の精神的外傷の影響から、個人を解放する治癒的恩恵を約束する。その約束は従来の精神医学の実践者にとって、彼らの実践の理論的な仮定と特に彼らが利用するテクニックの両面で挑戦になると見られるかもしれない。したがって、専門家のふたつのグループ（聖職者と精神科医）が、これらの問題に対する既得権を持っていると言えるかもしれないが、彼らはサイエントロジーに対する敵対を引き起こすようである。そしてその各々が、より広範な専門家の仲間たち（教師や医師など）、そして影響を及ぼすことのできるさらなる大衆を抱えている。

三番目に、サイエントロジーを始める人々の何人かは、資格あるサイエントロジーのオーディターになるために、従来のキャリアを放棄してさらなるトレーニングを受けると決めている。サイエントロジーを始めない両親、親せき、友人は、そのような決定を問題視するかもしれない。そのような宗教的選択をした後、家族や友人たちと仲たがいがいした場合、この新宗教に反対する人たちに対してさらに攻撃する手段を提供し、彼らの目から見ると「カルトが家庭を崩壊させる」ことになる。

四番目に、文化に対するサイエントロジーの倫理観の一般化、および普及の側面によって、敵対がさらに刺激されるかもしれない。伝統的なキリスト教は、禁欲主義志向を世界に広める役目を受け継ぎ、その教会や信徒の範囲を遥かに超えて、宗教とは禁欲的な倫理観を育成し、現世の快樂を犠牲にして来世の報いのために備えるべく厳粛であるべきという、真の宗教にある本質の仮定を教化し

てきた。その先入観が、人間は生来の罪深さと無能さという感覚を持ち、自己の救済を達成するには自分自身の努力によると吹き込んできた。その代わりに、人々は救世主である神だけに頼るべきだと命じられた。サイエントロジー教会は対照的に、精神的な益が現世で実現される可能性があると主張する。誰もが本質的に善であると強く主張し、誰もが自分自身の人生と活動に対して責任を取るべきだと教える。これらキリスト教会にとって、人類の生来の罪深さを拒絶する宗教はすでに侮辱であり、この問題は、20世紀後半の西洋社会を支配する気質（人間の幸福や勇気を強調し、人々に自分の全潜在能力に気付くように促す、自由放任の快樂主義的な気質）によってより好まれる倫理観を、サイエントロジーが採用しているという事実によっては軽減されない。世俗的な快樂主義志向を受け入れる多くの非宗教的な人々でさえ、思いがけない時に全人類を罪人として厳粛に非難することを放棄した教義を宗教として承認する準備はできておらず、また、少数は意識的に伝統的なキリスト教の立場を受け入れるかもしれない。しかし、これらの基本的な事柄が、異なる宗教に対して反対の立場を取らせる。したがって、一部の人たちは依然として伝統的な世界の見方を放棄しないため、またその他の人たちは彼ら自身、上記の気質を支持しないが、そうすることは宗教の役目であると信じるため、さまざまな宗教の人たちがサイエントロジーという新宗教に反対し、結束する。

VII. 社会の変化と宗教的な反応

確立された宗教の一般的な特徴は、古さを強調することにある。この主張は変わらぬ真理、永遠の真実、太古からの本物の知恵から来る、漠然とした強力な考えがあるという信条と密接に関係がある。同時に、社会生活における取り返しのつかないさまざまな変化が、止まないことに関する意識も広がっている。経済や産業の秩序が、迅速かつ知覚可能な変化を遂げている時に、社会構造が絶え間ない再適応の過程を示している時に、主要な社会的施設（政治形態、法律、教育、レクリエーション、家庭さえも）のすべてが、絶え間ない無意識における調整と、意識の改革プログラムの両方を経験している時に、宗教的な組織や考えが同様の変化と、改革の過程を経ていないとしたら不自然である。古さと伝統にもかかわらず、彼らはこれを行っている。しかし宗教には、礼拝にある「元のまま、これからも永遠にそのように」といった考えがあまりに定着しているため、その他の社会施設の人々が、新宗教が普及する考えやその革新的な手順を受け入れるのは難しいことがわかる。司法官が遠い昔からの判例法によって確立され、使い古された定義で仕事をするので、宗教を構成する法的概念が混乱と時代遅れの感をもたらすのかもしれない。何らかの理由で新宗教がマスメディアに攻撃された時、政治家は一般大衆の動揺に対して過敏になり、宗教の本質について従来の確立された考えを引き合いに出すことがある。ジャーナリストには、これら伝統的な概念を広域にもたらず役目があり、宗教問題を断続的に広範のパブリックの関心事へと高めることができる。宗教的な体制自体、自らの宗教活動の「現代化」の取り組みにもかかわらず、一般的に、教会外で起こったいかなる革新的な発展に対しても疑いの目を持つ。急速に変化する世界において、社会的施設はすべて流動的で、宗教だけが持続的で理論的に変わらない役割、機能、形態を有している。その証拠として、かなりの数の人たちが新宗教的実践のパターンと宗教的真実の新しい概念を探したり、求

めたりして精神の新たな探究に携わり、新しいタイプの宗教の組織に参加している。しかし、世論に影響を及ぼす要因の多くは、古くからある宗教の固定観念に未だ縛られており、新宗教のムーブメントに反対している。それは特に、新宗教が新しいものであり、それは社会的、宗教的な進化の過程そのものに抵抗するものと同程度に悪いものとしているからである。

ブライアン・ロナルド・ウィルソン

1995年8月2日

イギリス、オックスフォード

著者について

ブライアン・ロナルド・ウィルソン氏は、オックスフォード大学の社会学名誉助教授です。1963年から1993年まで、オール・ソールズ大学で特別研究員として勤め、1993年に名誉研究員として選任されました。

ウィルソン氏は40年以上にわたって、英国ならびに米国、ガーナ、ケニヤ、ベルギー、日本、その他の諸国における少数派宗教ムーブメントの研究を行ってきました。氏の研究には、これらのムーブメントについての出版物を読むことや、どこであれ可能な限り、会合、礼拝式、および家庭内で会員と交流することが含まれます。また他の学者の研究に対して継続的に注意を払うことや、批評的評価をすることも必然的に伴います。

氏は学士号（経済学）および博士号をロンドン大学から、文学修士号をオックスフォード大学からそれぞれ取得しています。1984年、オックスフォード大学は、氏の出版物の価値を認め、文学博士号を授与しました。1992年、ベルギー、ルーヴァインのカトリック大学では名誉博士号が授与されました。1994年、氏は英国学士院の特別会員に選ばれました。

さまざまな時期に氏は、さらに次のような地位に任命されています。

1957-58年、イギリス連邦基金特別研究員（ハークネス財団）、アメリカ合衆国、パークレーのカリフォルニア州立大学。

1964年、ガーナ大学客員教授。

1966-67年、アメリカ学術協会顧問、アメリカ合衆国、パークレーのカリフォルニア州立大学。

1968-72年、宗教社会学の研究顧問、イタリア、パデュー大学。

1975年、日本協会の客員研究員。

1976年、82年、86年、93年、客員教授、ベルギー、ルーヴァインのカトリック大学。

1978年、スナイダー客員教授、カナダ、トロント大学。

1980-81年、宗教社会学客員教授および宗教研究顧問、タイ、バンコクのマヒドル大学。

1981年、スコット客員研究員、オーストラリア、オーモンド大学、メルボルン大学。

1986年、客員教授、オーストラリア、クイーンズランド大学。

1987年、特別客員教授、アメリカ合衆国、サンタバーバラのカリフォルニア州立大学。

1971-75年、宗教社会学国際協議会（規律のための世界規模の組織）の会長を務める。そして1991年、宗教社会学国際協会と改名したこの組織から名誉会長として選任される。

1977-79年、「宗教に関する科学研究協会 (Society for the Scientific Study of Religion)」の委員（合衆国）。

「宗教に関する科学研究ジャーナル (Journal for the Scientific Study of Religion)」の欧州準編集者を数年間務める。

「宗教社会科学年報 (Annual Review of the Social Science of Religion)」の共同編集者を6年間務める。

氏はイギリス、オーストラリア、ベルギー、カナダ、日本、アメリカ合衆国で、さらには折に触れて、ドイツ、フィンランド、フランス、オランダ、ノルウェー、スウェーデンでも、少数派宗教ムーブメントについて広範にわたる講演を行いました。

氏はイギリス、フランス、ギリシャ、オランダ、ニュージーランド、南アフリカの法廷で専門家としての証言を要請され、オーストラリア、ラトビア、ロシア、スペイン、フランスの法廷では宣誓供述書に関する証拠を提供しました。氏はまた、宗教ムーブメントに関する専門的な助言を文書にして英国下院議会の国務委員会に提供しています。

他の研究に加えて、氏は少数派宗教ムーブメントに関わる本や、それに部分的に関わる本などを9冊出版しました。

『分派と社会：イギリスにおける3つの宗教団体に関する社会学 (Sects and Society: the Sociology of Three Religious Groups in Britain)』 London: Heinemann

and Berkeley: University of California Press, 1961年。再刷, Westport, Conn., United States, Greenwood Press, 1978年。

『派閥主義のパターン (Patterns of Sectarianism)』 (編集) London; Heinemann, 1967年。

『宗教分派 (Religious Sects)』 London: Weidenfeld and Nicholson; New York: McGraw Hill, 1970年 (フランス語、ドイツ語、スペイン語、スウェーデン語、日本語にも翻訳出版された。)

『魔術と至福千年 (Magic and the Millennium)』 London: Heinemann, and New York: Harper and Row, 1973年。

『宗教の現代の変貌 (Contemporary Transformations of Religion)』 London: Oxford University Press, 1976年 (イタリア語と日本語にも翻訳出版されている)。

『新宗教ムーブメントの社会的重要性 (The Social Impact of the New Religious Movements)』 (編集) New York: Rose of Sharon Press, 1981年。

『社会学的視点から見た宗教 (Religion in Sociological Perspective)』 Oxford: Clarendon Press, 1982年 (イタリア語に翻訳出版されており、日本語への翻訳出版は準備中。)

『派閥主義の社会的重要性 (The Social Dimensions of Sectarianism)』 Oxford: Clarendon Press, 1990年。

『呪文を唱える時間: 英国における創価学会仏教 (A Time to Chant: the Soka Gakkai Buddhists in Britain)』また [K. ダブルレアー共著] Oxford: Clarendon Press, 1994年 (日本語への翻訳出版は準備中。)

氏はまた、少数派宗教ムーブメントに関して25以上の論文を著述し、イギリス、アメリカ合衆国、フランス、ベルギー、オランダ、日本で研究や学術ジャーナルの編集を行い、『ブリタニカ大百科事典』、『社会科学百科事典』、『宗教百科事典』などの出版に寄与しました。そして現在、『イタリア百科事典』へ寄稿する準備中です。

